

# 京劇コードの特異性

加藤 徹

本稿は、雑誌「東方」(2007年1月号) pp.2-7に掲載した拙論である。一部の字句は掲載記事と異なる箇所もある。2013-4-17

[提要] 京劇「白蛇伝」を例に、モチーフ・インデックスやコードによる分析によって京劇作品を読み解く方法について論じた。

## 物語のコード

神話、民話、童話など口承文芸的な「物語」には、さまざまな「コード」が隠されている。ギリシャ神話、グリム童話、遠野物語などの物語については、作品世界の土台となっている暗黙のコードを分析し、民族の深層心性を読み解く研究が行われてきた。

中国の京劇や地方劇の伝統演目作品の多くは、作者不明である。長い歳月をかけて民衆のあいだで練り上げられてきた京劇の物語もまた、口承文学的なコードの宝庫である。

京劇作品の物語に隠された「京劇コード」は、単に外国の物語のコードと違うのみならず、中国の他の文芸ジャンルとくらべてもユニークである。

かつて日本の芥川龍之介は、京劇「虹霓関」「董家山」「轅門斬子」「双鎖山」「馬上縁」などの物語に「男の女を獵するのではない。女の男を獵するのである」という発想を見出し、「はなはだ哲学的である」と絶賛した(注1)。京劇作品の物語のユニークな発想や趣向を生み出す源泉となったものが、京劇コードである。

京劇コードの特異性を理解するために、まず、世界各地の物語に見られる普遍的コードの具体例を見ることにしよう。

### (一) 異類婚姻譚のコード

人間以外の「異類」の女が、自分の正体をおかくし、人間の男と結婚する。しかし男は、「見るな」のタブーを犯し、妻の本当の姿を見てしまう。正体を知られた妻は、人間界を離れねばならず、婚姻は破綻する。

右のような「メルシナ型」の異類婚姻譚は、世界各地の神話や民話、童話に広く見られる。

『古事記』のトヨタマヒメ(神武天皇の祖母)も、『夕鶴』(鶴の恩返し)の「おつう」も、夫に正体を見られたため、人間界を去る。「ウルトラセブン」や「ウルトラマン A(エース)」の最終回が、主人公が自分の正体(宇宙人)を告白して地球を去る、という結末であるのも、「異類婚姻譚のコード」の変型の応用である。

しかし考えて見れば、「異類婚姻譚のコード」には、合理的必然性がない。自分の正体を知られても、配偶者が合意さえすれば、婚姻関係は継続できるはずである。

例えば、『日本霊異記』(9世紀)に載せる「きつね」の語源説話では、人間の夫は、妻の正体がキツネと知ったあとも、妻に「来つ寝(きつね。一緒に寝よう)」と呼びかけ、夜な夜な、狭い意味での夫婦関係を継続したことになる。

近代以前の社会では、「異類婚姻譚のコード」は、必ずしも遵守されていなかった。庶民階級の物語世界では、人間と異類の「野合」も大らかに容認されていた。

「異類婚姻譚のコード」は、実は、残酷である。実社会で、ある特殊な出自をもつ人間が、自分の過去を隠し、恋愛のすえに結婚したとする。しかし結婚後、自分の秘密の出自を、何かのきっかけで配偶者に知られてしまう。その時点で、彼なり彼女は、無条件で身を引き、去らねばならないのか？

こう考えると、「異類婚姻譚のコード」は、共同体から異分子を排除すべし、という暗黙の社会的コードの反映であることがわかる。

東洋でも西洋でも、中世より近代社会のほうが、差別や異分子排除の風潮が強くなったと言われる。「来つ寝」のような人獣相姦譚も、近世以降は、物語の世界でさえ容認されなくなった。

京劇「白蛇伝」の物語では、世界共通の「異類婚姻譚のコード」が見事に破壊されているが、これについては後述する。

## (二) 戦闘ヒロインのコード

古来、男まさりの活躍をする戦闘ヒロインの物語は、世界各地で好まれてきた。

今日の日本の戦闘ヒロインが「リボンの騎士」「風の谷のナウシカ」「美少女戦士セーラームーン」など「戦闘美少女」ばかりである理由は、日本の若者世代の精神構造と無関係ではない(注2)。

京劇の戦闘ヒロインには、木蘭や荀灌娘のような「戦闘美少女」だけでなく、白素貞や穆桂英のような「戦闘既婚婦人」もいる(京劇で、日本にはないタイプの戦闘既婚婦人というキャラクターが活躍する理由は、京劇コードの一つ「宗族社会のコード」にある、と筆者は考えるが、これについての分析は別の機会に譲る)。

戦闘ヒロインの物語には、世界共通の不文律がある。それは、女性特有の生理的ハンディキャップを描いてはならぬ、という「生理描写抑制のコード」である。

物語のなかの戦闘ヒロインは、生理とは無縁である。敵のほうも、ヒロインの戦闘能力が低下するその日をねらって攻撃をしかける、という陰湿な作戦は取らない。ジャンヌ・ダルクの物語でも、アメリカ映画「チャーリーズ・エンジェルズ」「キル・ビル」などでも、生理描写抑制のコードは厳密に守られ、観客もそれに何の疑問ももたない。

中国でも、小説など文字文芸の物語に登場する戦闘ヒロインは、このコードに縛られる。しかし、語り物や演劇など、口承文学的な物語の世界では、生理描写抑制のコードは、大胆に破られる。

京劇「背子破奇陣」(楊家将)のヒロイン穆桂英は、妊婦でありながら鎧兜に身を固め、陣中で子を産み、その子を背負って敵兵を蹴散らす。京劇「南界関」のヒロイン徐金花も、子どもを背負いつつ、趙匡胤(後の宋の太祖)の軍と戦う。京劇「白蛇伝」のヒロイン白素貞は、つわりに苦しみつつ、臨月の身で天兵天将と大立ち回りを繰り広げる。

京劇コードの一つ「戦闘ヒロインへの観客の同情をかきたてるため、積極的に生理的ハンディを描くべし」という暗黙の不文律は、ジャパニメーションやハリウッド映画も顔負けの、大胆な発想である。

### (三) 神魔対決のコード

神仏と妖魔が対決する神魔物語では、神や仏はつねに正義であり、妖魔は悪である。

実は「神」のほうが悪で、妖魔のほうが正義である、という世界観をもつ「魔王ダンテ」(永井豪の漫画)のような異端的な作品は、少ない。

中国でも、小説系の神魔物語では、神仏の側を善として描く作品が多い。

いっぽう京劇系では、演劇という特権を生かして、「白蛇伝」「大鬧天宮」「虹橋贈珠」などのように、神魔の善悪を逆転した演目も、けっこうある。

京劇コードのユニークさの例は、右の他にも枚挙にいとまがないが、紙数の都合上、紹介を割愛する。

### サブカルチャーというニッチ

一般に、ハイカルチャーやメインカルチャーなどのメジャーな文芸作品は、その社会のコードを遵守する傾向が強い。

いっぽう、上流階級から軽視され、芸術界でも異端視されるサブカルチャーの作品世界では、コードは必ずしも守られない。社会から期待されていないぶん、既存の社会常識の枠を越えた、自由な作品作りが可能である。

かつての京劇は、今日のロック音楽のようなサブカルチャーであった。

京劇の名優・程硯秋は「守成法而不拘於成法、脱成法而不背乎成法」と言った。日本の「デーモン小暮閣下」も、「常識破りになれば、常識知らずになるな」と同様の言葉を言っている。「成法」とは、既存の常識や定石のことである。型を守りつつ、型破りの新たなコードを創造する、という自己革新こそ、サブカルチャーの特権であり、醍醐味である。

もともとサブカルチャーは、作品の送り手と受け手の距離が近い。「ファン・フィクション」を作品世界にフィードバックしやすいため、コードの改変が容易である。

日本のテレビ界でも、特撮やアニメなどの子供番組は、サブカルチャーである。沖縄出身の脚本家・上原正三氏は、外国人差別や身分差別への批判をこめて、メイツ星人(「帰ってきたウルトラマン」)や地竜族(「ゲッターロボ」)というキャラクターを七〇年代に創造した。当時の日本の大人むけのテレビドラマでは「放送コード」に抵触して制作困難であるこのようなモチーフも、七〇年代の特撮やアニメでは、作ることができたのである(注3)。

こうした事情は、中国社会でも同様だった。

京劇が誕生した二百年前、清朝の社会には、多くのコードがあった。特に、支配者たる満洲民族への批判は、厳しく弾圧された。ハイカルチャーの世界では、しばしば「文字の獄」が発生した。しかし京劇などのサブカルチャーでは、岳飛などの漢民族の英雄が満洲民族を殺す作品さえ、当局から黙認された(注4)。

京劇コードのユニークさは、京劇が中国文化において占めていたニッチ(生態学的位置)と、密接不可分の関係にある。

### 京劇「白蛇伝」のコード

日本でもよく知られている京劇「白蛇伝」を例に、京劇コードを分析してみよう。

白蛇の精が、人間の青年と結婚するというこの異類婚姻譚の起源は、千年前の宋代までさかのぼるが、時代や文芸のジャンルによって、その内容は大きく変容し、「演変」の歴史を重ねてきた。

白蛇を悪役とする「古い白蛇伝」では、白蛇は高僧によって調伏される。明代の小説「白娘子永鎮雷峰塔」（『警世通言』）も、その翻案である日本の「蛇性の姪」（上田秋成『雨月物語』）も、この系統である。

白蛇を正義として高僧を悪役とする「新しい白蛇伝」の起源は、清朝の時代までさかのぼることができる。京劇「白蛇伝」は、こちらの系統である。

京劇「白蛇伝」のストーリーは、物語の類型(モチーフ・インデックス)の定石と、世界共通の普遍コードのあいまに、独特のコードが織り込まれている。

「借傘」 峨嵋山で修行して神仙となった白蛇と、その妹ぶんである青蛇は、それぞれ「白素貞」と「青児」と名乗り、女主人と侍女の姿になって、風光明媚な西湖に遊ぶ。白蛇は、許仙という青年に出会い、恋に落ち、結婚する。

「驚変」 金山寺の法海和尚は、白蛇が天の摂理に反して人間と結婚したことを、法力によって察知する。法海は、許仙のもとを訪れ、「そなたの妻は妖怪である」と告げる。許仙は信じない。法海は、雄黄酒を渡し「これを端陽節の日に、そなたの妻に飲ませよ。妖怪の正体を現すであろう」と告げて去る。一年に一度、端陽節の時期は、「陽」の気が高まるので、「陰」である妖怪は体力が衰え苦しむのである(女性の生理的周期の暗喩)。白蛇は妊娠中で、しかも周期のせいで弱っていたが、夫に疑われぬため、あえて雄黄酒を飲む。白蛇は倒れ、ベッドのとぼりの中で寝込む。中をのぞいた許仙は、白蛇の真の姿を見て、ショックで死ぬ(「見るなのタブー」の変型)。

「盗仙草」 白蛇は、夫を蘇生させるため、仙山に薬草を採りに行く。仙草を守る鹿童や鶴童と戦闘になるが、つわりのため、うまく戦えない(生理描写抑制の裏コード)。白蛇の命がけの戦いぶりを見た南極仙翁は、心を動かされ、白蛇が仙草を持ち去ることを許す(難題婚のコード)。

「水漫」 許仙は、白蛇が持ち帰った仙草のおかげで蘇生した。が、法海にそそのかされ、白蛇と別れるため、金山寺に入る。白蛇は、夫に正体を知られたあとも、あきらめず、金山寺に行き、法海と交渉する(異類婚姻譚の裏コード)。法海に拒絶された白蛇は、青蛇や「水族」を率いて、金山寺を水攻めにして、天兵天将と戦うが、陣痛のため敗走する。

「断橋」 許仙は、白蛇を裏切ったことを後悔し、金山寺を抜け出して、白蛇と青蛇を追いかける。一同は、西湖の断橋で再会する。白蛇は許仙の不実を滔々と責めるが、最後は和解する。

「合鉢」 白蛇は一男子を生む。その後、法海と神将によって拘束され、雷峰塔の下に封じこめられる。青蛇は辛くも逃げる。

「倒塔」 修練をかさねた青蛇は、雷峰塔を倒壊させ、白蛇を救出する(神魔対決の裏コード)。白蛇は、許仙と、成長した息子と再会する。

現行の京劇「白蛇伝」は、田漢(1898-1968)らが改編した「田漢本」にもとづく。それ以前の本来の京劇や地方劇の「白蛇伝」には、「借傘」の前に次の物語があった。

「下山」 白蛇の精は、天上の仏弟子と恋仲になった。仏弟子は、仏罰によって人間界に転生させられ、前世の記憶を失った。これが許仙である。白蛇は、恋人と再会するため、下界にくだる(贖罪型の貴種流離譚)。

「収青」 天からくだる途中の白蛇の精を、青蛇の精(男)が、わがものにしようと襲いかかる。しかし青蛇は敗れ、性転換して女となり、白蛇の下僕となる(変成女子譚)。(注5)

右の二つの話は、「輪廻転生」「性転換」というモチーフが、迷信的・倒錯的であるとして「中国共産党コード」に抵触したため、田漢本では削除された。ただし、中央の威令から比較的自由であった川劇などの地方劇では、いまでも「下山」「収青」を残している。

また、現行の京劇「白蛇伝」の結末は、「光明のしっぽ」という中国共産党コードの影響で、「倒塔」というハッピーエンドに改作されているが、もともとの結末は「祭塔」という悲劇的なものであった。(注6)

現行の京劇「白蛇伝」の「驚変」の場面で、端陽節の陽気のせいで白蛇がダウンしているのに、青蛇が平気なのは、青蛇が本来はオスすなわち「陽」だからである。ところが現行版では、青蛇がオスであったという「収青」を削除してしまったため、そのあたりの辻褄があわず、破綻が生じてしまっている。

明代の小説「白娘子永鎮雷峰塔」は、世界共通の物語のコードをふまえた、おとなしい作品であった。(注7) しかしその後、口承文芸の世界で演変を繰り返すうちに、コードの創造的破壊が行われ、京劇「白蛇伝」のようになった。

京劇や地方劇の演目作品には、このようなユニークな作品が多い。京劇コードを分析すると、近世中国の民衆が、世界的に見てもいかに豊かな発想をもっていたかが、よくわかる。

## 京劇コードと中国文化

現在、京劇界は、出口の見えない構造不況に苦しんでいる。

今日の京劇は、市場経済で生き残るため、「影視作品」(映画とテレビドラマの総称)をまねるようになった。筆者が知る京劇界の実作者たち(脚本家や俳優)も、そうした傾向に、疑問をもたない。

しかし外国人である筆者の目から見ると、京劇復活のカギは、むしろ、京劇でしか許されない独自の「京劇コード」を創造してゆくことある。京劇が影視作品の亜流になるならば、大衆はますます京劇から離れるであろう。

中国の映画界は、一見、活況を呈しているが、実は、京劇と同じ衰退の道をたどりつつある。中国映画が一番面白かったのは、私見によれば、八〇年代であった。当時の中国映画作品(特に西安映画製作所系の作品)には、中国共産党コードの束縛に対するチャレンジ

精神や、他国の映画にはない独特の味わいがあった。しかし今日の中国映画は、中国共産党コードと、海外進出をにらんだ商業主義という二重の自主規制に縛られ、かつての輝きを失ってしまった。

中国の現代文化の未来を見せるうえでも、京劇コードを分析し、新たな視点から京劇作品の再評価を行うことは、有用であろう。

注1 芥川龍之介『侏儒の言葉』。加藤徹『京劇』中公叢書 二〇〇一年 一二六頁。

注2 斎藤環『戦闘美少女の精神分析』太田出版 二〇〇〇年

注3 切通理作『怪獣使いと少年』宝島社 一九九三年

注4 加藤徹『京劇』 二六頁

注5 地方劇の「収青」にあたる京劇演目は、「双蛇闘」であった。李洪春『京劇長談』中国戯劇出版社、一九八二年、四二〇頁。

注6 地方劇では「祭塔」のあとに宗教色の濃いハッピーエンド「仏円」があったが、京劇ではあまり上演しなかった。

注7 小説や演劇などの「白蛇伝」物語の変遷については、南條竹則『蛇女の伝説』（平凡社新書、二〇〇〇年）に要領よく解説されている。